何故、今「玄牝（げんぴん）」なのか

まほろば主人

鏡には　うつらぬ人の　まごころも
　さやかに見ゆる　水茎（みずくき）のあと
　～　明治天皇　～

こう、みんな瞑目し唱和してから、おもむろに墨を擦（す）り始める。

そして、擦り終わってから、お手本を見ながら写した書道の時間。それは、小学校四年生の教室での風景だった。今でも、思い出す、この歌とその所作。

その儀式ともいえる静謐（せいひつ）なひと時が、子供心ながら新鮮だったのだろうか。この何とも非日常的な体験が、60年の時を経ても心に刻まれている。こうして、木造の古びた校舎の一場面を回想する今日昨日。

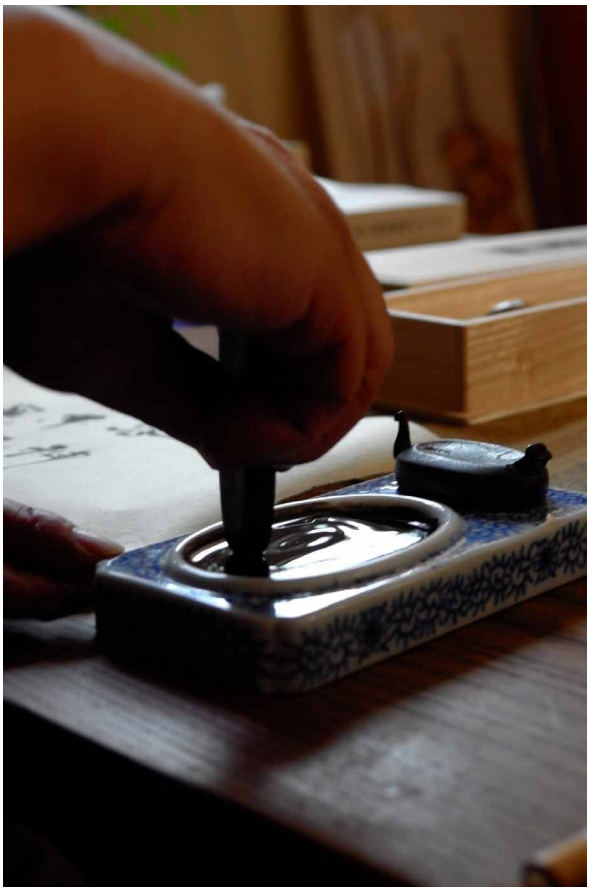
書道は墨を擦る処から始まる。人格修養の時であり、日本的魂の啓発の場であり、道徳教育の根幹を為していた。

ところが、先年、奈良「古梅園」さんから、こういう話を聞いて、しばし耳を疑った。

「今、小学校の書道の授業では墨汁が使われ、『昔、墨というものがあって、硯で擦って書いていました……』と教えている。ですから、固形の墨が全く売れなくなりました」

それどころか、「今の書道界自体が様変わりで、書家の先生方も墨を用いられる方も少なくなられ、競書の展覧会用のために墨汁一辺倒になってしまいました」と嘆かれるのだ。

「玄牝」には言葉にできないエネルギーを感じる。その力と、書が一つになるとき、自我を超えた境地が訪れる



心静かに墨を刷る。やがて墨と一体化し、静謐な時間が訪れる

今の日常、筆どころか、ペンや鉛筆さえも使われず、パソコンのキーボードを指一本で何不自由なく、事が済まされる時代のまっただ中にいるのだ。

誰もが、何かがおかしい、何かが狂って来た、と思うことさえない一億総パソコンなのだ。そういう私さえ、こうしてキーボードを叩いているのだから説得力が甚だ無い。

何故、教室から墨が消えたのか。簡単に言うと、取り扱いが面倒なのと、書く時間が長く取られるからだ。世に、これを効率主義、合理主義という。この流れは堰き

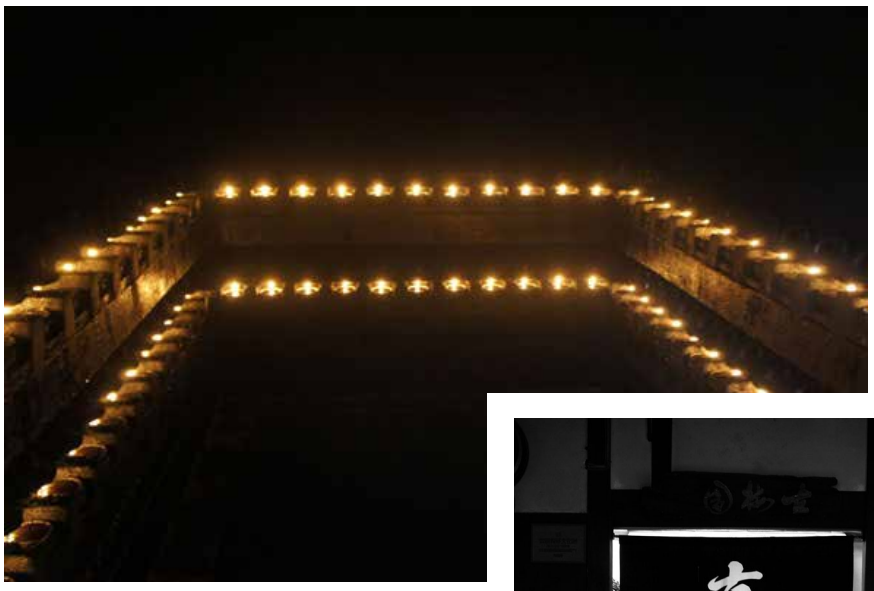
止められず、奔流の如く戦後、日本を世界を席巻した。この能率の為に、無用なものは切り捨てられた。殊に、伝統文化と名の付くものは、非効率も甚だしい。

日本文化、広くは亜細亜圏の文化は漢字によって、その精神や型が伝わって来た。それを継承してきた媒介が書であったはずである。しかし、今全くと言っていいほど、筆は使われなくなった。それは、時代錯誤な趣味人の手慰みでしかなくなった。しかし、何千年もかけて陶冶して来たその筆法にこそ、自然の流動や静止の妙を体現した真理が潜んでいた筈である。それは、東洋の叡智であり、人類の宝であった。それが欠落してしまった現代、何をか言わんやである。

そんな、誰もが筆など持たない、墨など売れない時代に、何故あえて「玄牝」などという目の飛び出るような墨を作ったのか。

それは、時代への訴えであり、抵抗である。

植物の実を絞った油を燃やし、その煤を膠で練り、型に入れ、干して寝かす、その懇ろな時間の熟成と工程こそ日本と亜細亜の精神文化であると主張したい。効率の為に、化学的カーボンブラックを樹脂溶剤と混ぜて墨汁を作る。それはそれで時に簡便で都合が良い。しかし、それが主流になり、本体がその為に抹殺される事が恐ろしいのだ。これは、笑い事ではなく、この現象が、各地各所各業界で行われている。目先の簡単便利の経済効果はやがて疲弊するばかりか、周り



麻の油を燃やして煤をとるところから、伝統の墨づくりが始まる。職人の掌で精妙な成型の工程をしきる。

古梅園ではおよそ 300 年ぶりに麻墨が復興することとなった。

を引き込みながら、なし崩れに崩れて行く。借り物はあくまでも借り物、偽物は最後まで本物に代わることはない。

食の世界でも同じだ。何故、今「新醤（あらびしお）」なのか。

現代の大手企業の経済戦略から見ると、何を愚かなことを！と思われるのがおちであろう。手間と材料と経費から見ると、こんなアホナことを何故やるのか、不思議であろう。しかし、その馬鹿なことを、馬鹿になって誰かがやらねば、日本から伝統の灯が消える。

脱脂大豆や速醸仕込みの醤油で、見かけは変わらない、より安いものに、靡（なび）いて来た。味が同じだから、値が安くなるから、大量に使えるから……そのコマーシャルリズムに乗せられ、我々の趣向は次々に新手法に踊らされて、本源を忘れる。みな古いものは、過去の遺物でしかなくなるのだ。だが、現代の不幸は、効率合理主体の資本経済によって、狂わされて来たことに、誰もが気付かねばならない。

自然食品店を創業し、継続することこそ、時代の流れに棹（さお）さすことであり、主流への抵抗勢力なのである。「玄牝」はまさに、まほろばの現代社会への訴えであり、その証拠の品（しな）でもある。それは、一丁（ちょう）と言う僅（わず）か15gと軽いが、訴えていることは泰山の如く重い。

この「新醤」もまた、頑な手仕事を守る蔵人たちの手によって生み出される。

玄牝（桐箱・麻布と麻綿、解説入り）
108,000円（税込）

天然の状態でフラーレン構造を有するという稀有な鉱物、シュンガイトを練りこんでいる。この石の高いエネルギーが墨質を劇的に変えたのだろう